





●与謝野光・新聞進一編集  
与謝野晶子選集 V

春秋社版

## 略 歴

よさのひかる  
与謝野 光 明治36年1月、与謝野寛・晶子の長男として  
東京に生まる。大正15年慶大医学部卒業。厚  
生省公衆衛生院教授、東京都防疫課長、東京  
都衛生局長等を歴任、現在東京医科大学理事  
同大学高等看護学校校長、慶大文学部講師。  
医学博士。第三次『明星』主宰。  
住所—東京都渋谷区六本木5-13-14-904

しんましんいち  
新聞進一 大正6年9月東京都に生まる。昭和15年東大  
文学部国文学科卒業。北大助教授、文部省教  
科書調査官を経て、現在青山学院大学教授。  
専攻——中世歌謡、近代短歌、著書『歌謡史  
の研究』『明治大正短歌史』その他。  
住所—東京都日野市南平1473の142

### 晶子随想集

〔与謝野晶子選集・5〕

昭和43年6月5日 第1刷発行

定価 ￥350

検印  
省略

編 者

与 謝 野 光  
新 間 進 一

発 行 者

東京都千代田区外神田2の18  
鷲 尾 貢

印 刷 者

東京都台東区寿3の13の13  
市川印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 春秋社  
外神田2の18 会社

電話 (255) 9611~5 振替 東京 24861

(徳住製本) 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

N. D. C. 918

# 目次

## 〔婦人問題〕

|                     |   |
|---------------------|---|
| 母性偏重を排す……………        | 七 |
| 女子の徹底した独立……………      | 七 |
| 平塚さんと私の論争……………      | 六 |
| 平塚・山川・山田三女史に答う…………… | 七 |
| 堺枯川様に……………          | 三 |
| 婦人も参政権を要求す……………     | 四 |
| 折々の感想(抄)……………       | 五 |
| 新婦人協会の請願運動……………     | 六 |
| 婦人運動と私……………         | 六 |

〔教育問題〕

|            |   |
|------------|---|
| 女子と高等教育    | 充 |
| 人間性の教育     | 齒 |
| 文化学院の設立に就て | 三 |

〔社会問題〕

|          |     |
|----------|-----|
| 三面一体の生活へ | 允   |
| 何故の出兵か   | 一〇  |
| 出兵と婦人の考察 | 一〇三 |
| 食糧騒動に就て  | 一〇七 |

〔詩歌論〕

|       |     |
|-------|-----|
| ひらきぶみ | 一二三 |
| 簞柑子   | 一二九 |

私はどうして歌を作るか(抄)……………一四四

私の歌を作る態度(抄)……………一四九

斎藤茂吉さんに答う……………一五六

私自身の短歌……………一六一

押韻詩の試作……………一六四

〔随感・紀行〕

産褥の記……………一六八

巴里にて……………一七五

ロダン翁に逢った日……………一七九

人間の若さ……………一八四

北海道より……………一八八

選集既刊分の正誤表……………一九四



晶子随想集

## 凡 例

一、本巻には、与謝野晶子の評論・隨筆・紀行などの著作の中から、主要なものを選んで収めた。選択の基準として、歴史的にみて意義深いもの、すなわち論争など呼びおこしたようなものはつとめて採り、また晶子の識見や個性の窺えるものを多く載せた。

一、婦人問題、教育問題、社会問題、詩歌論、隨感・紀行の五部に分かち、各々の中での排列はその初出の年次に従った。

一、表記は、第三・四巻と同様の方針をとった。原文の旧仮名づかいを現代仮名づかいに改め、漢字を当用漢字の新字体にし、また適宜漢字を仮名に直し、ルビを増減するなどである。

一、本巻は、本選集の最終巻に当たるので、巻末に晶子年譜・晶子系図を付して、読者の便に供した。年譜のうち、詩歌集のアラビア数字は、第一・二巻の出典一覧に付した制作順の番号である。各巻の出典一覧は、おのずから簡単な晶子書誌となっているので、年譜はそれに譲った点がある。相参照されたい。

母性偏重を排す

トルストイ翁に従えば、女は自身の上に必然におかれて、いる使命、すなわち労働に適した子供をできるだけたくさん生んで、これを哺育しかつ教育することの天賦の使命に自己を捧げねばならぬと教えられ、またエレン・ケイ女史に従っても、女の生活の中心要素は母となることであると説かれる。そうしてトルストイ翁では、男の労働に対してする余力ある女の助力が非常に貴いものであるとして許容せられるに反し、ケイ女史では、女が男と共にする労働を女自身の天賦の制限を越えた権利の濫用だとして排斥せられる相異がある。またトルストイ翁では、男女の生活の形式は異なっている。また一般の天賦においてはまったく平等である

と見られるのに反し、ケイ女史では、自然が不平等に作つた男女の生活を人間が平等にしようとするのは放縦であると見られる相異がある。しかし体的労働と心的労働が男に属する天賦の使命であつて、女にはそれが第二義の事件であるという思想は、二家ともに一致している。

こういう二家の主張と、これを継承し、または期せずしてこれと同調の思想を述べる主張が、世に謂う母性中心説である。私はこの説に対して疑惑がある。

誤解を惹かないために、あらかじめ断わっておく。私は母たることを拒みもしなければ、悔いもしない、むしろ私が母としての私をも実現しえたことに、それ相応の満足を実感している。誇示して言うのではなく、私の上に現存している真実をありのままに語る態度で、私はこれを述べる。私は一人または二人の子供を生み、育て、かつ教えている婦人たちに比べて、それ以上の母たる労苦を経験している。この事実、ここに書くこととする私の感想が母の権利を棄て、もしくは母の義務から逃れようとする手前勝手から出発していないこ

とを証明するであろう。

女が世の中に生きてゆくのに、なぜ母となることばかりを中心要素とせねばならないか、そういう決定的使命が何によって決定されたか。私の意識にはこの疑問がまず浮かぶ。そうしてトルストイ翁のこれに対する答は、「人類の本務は二つに分かれる。すなわち一は人類の幸福の増加、他は種族の存続。男は後者を履行することができないようにされているので、主として前者にまで召命されている。女は彼らのみがそれに適しているので、全然その後者に召命される。……その本務は人間によって発明されたものでなく、物事の本性の中にあるのである」（加藤一夫さんの新訳『我等何を為すべきか』に拠る）と言われる。

この答を得て、かえって私の疑惑は繁くなった。それは恐らく私の思慮の足りないせいであろうが、私にはトルストイ翁のこの答の中に、重大な誤謬が含まれているように想われてならない。翁は、男女の本務が物事の本性の中で予定されていると言われる。「物事の本性」とは、男性は男性の本質、女性は女性の本質

の意味であろう。私はそれを考察してみた。そうして私は、「物事の本性」が男性・女性という外面的差別の奥に、「人間性」というものでまったく内面的に平等であることを見た。そうして人類の本務は、トルストイ翁の説かれるように二つを大別されていない。ただ一つ「人類の幸福の増加」、言い換えればよりよく生きてゆこうとする根本欲求の実現のほかは何もないのを見た。これが人間性の全部である。

私の考察が間違っていないなら、この唯一の根本欲求には、人間の万事が含まれている。トルストイ翁の言われた「種族の存続」もその万事の内の重要な一大事として、私には見られる。そうして人類の本務——人類の幸福の増加——には、総ての人間が平等に参加し、男女の性によって外面の状態に差別はあっても、本質的には男も女も平等の人間として人間性の完成に力を協わせているように私には見られる。もちろん世の中には、男女の協力が不権衡になり、なかにはほとんど男女いずれかの力の加わらない事実さえ存在している。平等を欠いたそれらの事実、すべて「人類の幸

「福の増加」のために無用、または有害な事実ばかりであり、それによって世界の調子を失い、進歩を遅滞し、悲慘を簇生している。例えば、男性ばかりで計画された戦争という殺人事業のようなものがそれである。

人間の万事は、男も女も人間として平等に履行することができる。それを男性・女性という形式の方面から見れば、その二つの異なった形式に従って、いろいろの異なった状態が履行の上に、或いは生じたり生じなかったりするだけである。具体的に言えば、トルストイ翁は、男は種族の存続を履行することに与りえないように言われたが、それは何びとにも明白な誤謬である。人間は単性生殖をなしない。男は常に種族の存続に女と協力している。この場合に、ただ男と女とは状態が異なるだけである。男は産をしない、飲ますべき乳を持たないという形式の方面ばかりを見て、男は種族の存続を履行しえず、女のみがそれに特命されていると断ずるのは浅い。性情の円満な発達を遂げた父母の間に、子に対する愛が差別のないのを考えても、内面的には男女の協力が平等であることが想われる。

私はこうして、トルストイ翁のいわゆる「物事の本性」を、私の力の及ぶかぎり透察した。そうして私は、人間がその生きて行く状態を、一人一人に異にしているのを知った。その差別は、男性・女性という風な大づかみな分け方をもって表示されうるものでなくて、正確を期するなら一々の状態に一々の名をつけてゆかねばならず、そうして幾千万の名をつけていっても、差別はさらに新しい差別を生んで、表示し尽くすことのできないものである。なぜなら、人間性の実現せられる状態は、個々の人によって異なっている。それが個性といわれるものである。健やかな個性は静かに停まっていない、絶えず流転し、進化し、成長する。私はそこに何が男性の生活の中心要素であり、女性の生活の中心要素であると決定せられているのを見ない。同じ人でも賦性と、年齢と、境遇と、教育とによって、刻々に生活の状態が変化する。もっと厳正に言えば、同じ人でも一日のうちにさえ幾度となく生活状態が変化して、その中心が移動する。これは実証に困難な問題でなくて、各自にちょっと自己と周囲の人々とを省

みれば解ることである。周囲の人々を見ただけでも、性格を同じくした人間は一人も見当たらない。まして無数の人類が個々にその性格を異にしているのは、言うまでもない。

一日の中の自己についてもそうである。食膳に向かった時は、食べることを自分の生活の中心としている。或る小説を読む時は、芸術を自分の生活の中心としている。一事を行なうたびに、自分の全人格はその現前の一事に焦点を集めている。このことは誰も自身の上に実験する心理的事実である。

このように、絶対の中心要素というものが固定していかないのが、人間生活の真相である。それでは人間生活に統一がないように思われるけれども、それは外面の差別であって、内面には人間の根本欲求である「人類の幸福の増加」によって、意識的または無意識的に統一されている。食べることも、働くことも、子を産むことも、すべてよりよく生きようとする人間性の実現にほかならない。

或る一事を行なうたびに、生活の中心がその一事に

移動して焦点を作り、他の万事は縁暈としてそれを囲繞している。こうして人間性が無限・無数にその中心を新しく変えてゆけばこそ人間の生活が活気を帯び、機勢<sup>はすみ</sup>を生じ、昨日に異なった意義と価値を創造して進むことができる。これが人間生活の堅実な状態である。そうして人間には、これと齟齬する病的な状態がある。すなわち物を食べていながらこのことに熱中しがたくて、食べている物の味を享受することができないような状態である。何事も沈滞<sup>しんたい</sup>していて、中心となるまでに焦点を作らない状態である。それが人間の根本欲求と分裂している病的な状態であることは、人間がその状態に満足しないのみか、それを不純、怠惰、卑怯、姑息、頹廢、墮落というような自覚をもって自ら憎悪し、自ら愧じ、自ら苦しみ、自らできるだけそれを脱しようとして焦燥<sup>あせ</sup>るので明らかである。

いま一つ病的な状態がある。しばしば無用または有害な或る一事に、生活の中心が集まりやすいことである。例えば女が低級な榮譽心——虚栄心——を中心として常に行動するような場合は、決してそれが女自身

の上に眞実の幸福を持ちきたさない。かえって女自身の生活を人間の根本欲求に反して不幸に導くものである。こういう場合には、人間の本務を標準としてその悪性な中心要素を批判し、それを一掃して、他の必要有益な中心要素の起伏する堅実な生活状態に就かねばならない。

私は母となった時に、初めて母としての實際生活が、私の上に新しく創造されて来たのを経験した。そうして、自分の子供を育てることに私の注意が集まるたびごとに、そこに母性が私の生活の中心要素となり、私の自我の全部を統率しているのを経験した。私の子供が私の外になくて、私の自我の中に愛をもって抱かれているのを明らかに見た。まったく私の子供は私の内に浸透して、不可分の関係になっている。私は、私のように子供のある女にとって母性が重要なものであることを、子供を持つ他の婦人たちとともに実感することができた。

しかし私が母となったことは、決して絶対的ではなかった。子供の母となった後にも、私は或る一人の男

の妻であり、或る人々の友であり、世界人類の一人であり、日本臣民の一人である。また思索し、歌い、原稿を書き、衣と食とを工夫し、その他あらゆる心的労働と体的労働とに服する一人の人間である。私はそれらの一事一事を交代に私の生活の中心として、必要であるかぎりそれにじっと面して専心することを、私の生活の自然な状態としている。

私は母性ばかりで生きていない。母性を中心として生きているように見える時にも、私の自我には、前に挙げたような私の他の諸性が、ちょうど人が現に見守っている一つの星を繞って無数の星が群を成しているように回転している。そうしてそれらの諸性の一つが、次の時には現在の中心である母性に代わって私の生活の中心となり、さらにまた他のものが次ぎ次ぎに代わってゆく。それらの無数に起伏して異なった中心を作る諸性が互いに輔け合い、埋め合わせ、もしくは互いに撓ね返し、闘争して、不断の流転を続けることによって私の自我は成長し、私の生活は開展する。

もし私が自分の生活状態に一々名をつけるなら、無

数の名が要るであろう。母性中心、友性中心、妻性中心、労働性中心、芸術性中心、国民性中心、世界性中心……それは煩雑に堪えない上に、ほとんど無用の命名であるほどに、私の生活の中心は相対的無限なものであって常に起伏し変転している。私はかりに一日二十四時間といえども、一つの生活状態にもっぱらでありえない、まして絶対に母性中心をもって生涯を終始することは、私が絶対に芸術性中心をもって生涯を終始するのと同じように不可能である。そうしてこの不可能は、私ばかりでなく、いっさいの女の上に言いうることである。例えば私が自分の子供に乳を吞ませようと注意した時に、私の現在は母性を中心として生きているが、次の刹那にまだ自分の乳房を子供の口に含ませているにかかわらず、もはや私の生活の中心は移動して、私は或る一篇の詩の構想に熱中していることである。前の私が母性中心の状態にあることは、その時私の子供の哺育のために必要である。その必要に用立った後に、私の母性が中心の位地を次に登って来た芸術性に譲り、その芸術性の無数な背景の一つとなっ

て私の意識の奥に遠ざかってしまうのは当然である。二つの物は、同時に同じ位地を占めえない。子供を哺育する時にもっぱら母性中心であり、詩を作る時にもっぱら芸術性中心であるからこそ、哺育と詩作の二つの事が私の生活に遂げられるのである。私はどうしても、絶対的母性中心の生活を営みうる状態を想像することができない。もし一刹那も子供から外に心に移さずにいて、生涯をそれで貫徹することのできる女があるなら知らぬこと、人間性は無限の欲求を生み、その欲求の一つ一つをそれが自分の成長に貢献するものであるかぎり、尊重して忠実に履行するのが人間生活の自然であるとするなら、誰も一つの欲求に偏してはいられないはずである。

世間には自分の生活に公と私、主と客、真実と方便、本務と余技、第一義と第二義という風な差等を設けている人たちが少なくない。私も近ごろまでは、漫然とそういう二元的な物の見方を模倣していた。けれども、真に現在に生きようとする自覚が明確の度を増してゆくに従い、「人類の幸福の増加」という人間の本務――

私の本務——に役立つかぎり、万事が一樣に自分の眞実の生活であり、第一義の生活であるように感ぜられて来た。以前は恋愛や、芸術や、学問や、宗教や、社会改良事業などというもののばかりを人間の第一必要品のように思い、みずから衣食住の實際問題に困っているながら、かえって逃避的な支那賢人の虚偽な告白などに欺<sup>だま</sup>されて、その衣食住などを第二義の問題のように誤解していたのであったが、近ごろはどれも私にとって同じく第一義の価値を持つようになって来た。エレン・ケイ女史などが、生活の表面に起伏して中心要素となる無量の欲求が永遠に対立しているこの見やすい事実を知っていたながら、その欲求の中の母性ばかりを特に擁立して絶対の支配権を与え、いわゆる絶対的母性中心説をもってわれわれ婦人に教えられるのは、対等であるべき無数の欲求に、第一義・第二義の褒貶を加える非現実的な古い概念から脱しきらない議論のようには私には見える。

人が親となることは、親となる資格を備えている人という制限を越えない範囲で望ましいことである。未

成年の男女、不健康な男女、無智な男女、まったく経済的自活力のない男女、それらは結婚するのさえ不幸の本である。ましてそれらが親となることは、一層の不幸が予知せられる。その場合、男には父性の生活を、女には母性の生活を経験せしめない方がかえってよい人たちである。また結婚して親となる資格を備えていても、失恋とか孤独を好む性質とかによって結婚を好まず、職業の関係から学者、宗教家、探検家、教育家、飛行機家、看護婦などのように結婚を避ける人たちがあつた。その人たちは結婚して親となることにみずから一種の不幸が予知せられ、それを予防する摺<sup>すり</sup>実な必要からそれを避けているのであり、或いは結婚もせず親ともならない方が、かえって他の事によって人間の本務——人類の幸福の増加——をより自由に、より猛烈に実現しうるゆえんから、わざと夫妻・父母の生活を避けているのである。また夫婦生活を開きながら、生理的に親となりえない男女がある。それは親となることを避けているのではないが、よぎなく男は父性から、女は母性から遠ざけられているのである。それらの夫

婦は必ずしも不幸を感じていない。子供のいないことによつて、知らず識らず親としての生活以外に豊富な生活を送っている男女も多い。かえつてたくさんの子供を持つたために、他の活動を侵害せられて、子供のないのを不幸と感じている夫婦よりも幾倍かの不幸に陥っている男女もある。

親となる多数の男女があるとともに、前述のように親とならないで一生を送る男女も少なくないのが人間の実状である。母性中心説の第二の誤謬は、この実状を看過していることであるように想われる。もしいっさいの男女がことごとく健康で、教育があつて、経済的能力を備えていて、夫婦としての堅実な愛が容易に成り立って、自由と幸福の予想せられる境遇が与えられて、夫婦が必ず子供を持つことができて、そうして親となることを最上の生活と信じてそればかりを望んでいるなら、男は父性中心の生活を、女は母性中心の生活を営むことに専心し、それをもってケイ女史のいわゆる「生まれつきの制限」と自信して、父性・母性以外の無数無限な人間の活動を第二義とし、方便とし、

そうして子供を持つことばかりを、ケイ女史のように人間の愛の真の目的とすることができらるであらう。

人生が空想小説でなくて嚴肅な目の前の一大事実であるかぎり、人間は一人一人の性情と境遇とに従つて各自の生活方針を変化してゆかねばならない。トルストイ翁の言われる「天賦の使命」とか、ケイ女史の言われる「個人の権利の生まれつきの制限」とかいうようなものが私たちのために、そうして私たちの外に、あらかじめ一樣に決定されていようとは、どうしても考えられない。人間は一人一人の生きてゆく必要から、一人一人の権利と義務を——生まれつきの制限ではなく——各自が個別にその時その時の必要を制限として、自由に伸張しながら履行してゆく外はないように私には見える。白耳義ベルギの首府の看護婦学校長であつた英国婦人エジス・カエル女史が、去年ドイツ軍のために捕えられて従容しやうようとして死刑に就いたようなことは、母性中心説から見れば当然批難せらるべきことであらう。女史は未婚で終わり、母性を実現せずに国難に殉じてしまつたから。しかし女史自身の最後の微笑は、自分